

大志史跡

240102 石原

①葵公園

◎徳川家康公が関ヶ原の戦いと大坂冬の陣に向かう途中、真清田神社へ戦勝祈願した際、立ち寄った佐分五郎兵衛清政宅がここにあった。屋敷の藪中から、旗竿にする竹をとり、家康に献上したことが『尾張名所図会』から分かる。

◆1600年「関ヶ原の合戦」のとき、徳川家康は関ヶ原へ向かう途中、一宮により、佐分家の屋敷で休憩し、真清田神社で戦勝祈願をしました。

◆その際、佐分氏は、屋敷の竹藪から、戦いの旗竿（はたざお）にする竹をとり、家康にさしあげました。

◆関ヶ原の合戦は、見事、徳川家康の東軍が勝ちました。

◆1614年、豊臣方と戦った「大坂冬の陣」のときにも、ここに立ちよって戦いにいどみ、勝利しました。

◆そのようなことから、この辺りは、かつて、徳川家の葵のご紋からの「葵町（あおいちょう）」、幕府から土地を認められたという意味の「御朱印地町（ごしゅいんじまち）」という町名がついていました。現在は、本町2丁目になりました。

◆明治天皇が全国をお回りになったとき、一宮では、ここに佐分家に立ち寄られました。

②真清田神社

◎一宮という市名に由来する真清田神社。平安時代から「尾張国一之宮」として奉られてきた。清く澄んだ水田の様子から名付けられ、祭神は、天照大御神の孫である天火明命（あめのほあかりのみこと）。仕事運や出世運、開運厄除、子孫繁栄にご利益があるとされている。境内には、七夕伝説の服織神社、三八稲荷社、桃花祭馬具などが展示されている宝物館、戦災を逃れた徳川義直公奉納の「吐水龍」、「覗き井戸」、「おもかる石」などがあり、パワースポットとしても有名である。

○真清田神社は、平安時代から尾張国の「一の宮」として奉られてきた。神社の位を表す「一宮」は、いつしか神社を中心として発達したこの地の名称として用いられるようになった。

○ホームページ「真清田の由来と歴史」

当社の鎮座する一宮市は、古くは木曾川の流域に沿っていました。流域は常に文化の形成に大きな役割を果たします。一宮の発展にも、木曾川の恩恵があります。今でこそ、繊維の街として有名ですが、もともとこの地域は、木曾川の灌漑用水による水田地帯として、清く澄んだ水によって水田を形成していたため、真清田（ますみだ）と名付けられたといわれています。当社の歴史は、平安時代に国家から国幣の名神大社と認められ、神階は正四位上に叙せられ、尾張国の一宮として、国司を始め人々の崇敬を集めました。鎌倉時代には、順徳天皇は当社を崇敬され、多数の舞楽面をご奉納になりました。その舞楽面は、現在も、重要文化財として当社に保存されています。江戸時代には、徳川幕府は神領として、朱印領333石を奉りました。また、尾張藩主徳川義直は、寛永8年（1631）当社の大修理を行う等、崇敬を篤くしました。明治18年には国幣小社、大正3年に国幣中社に列し、皇室国家から厚待遇を受けました。戦後は、一宮市の氏神として、一宮市民はもちろん、尾張全体及び近隣からも厚い信仰心を寄せられ今日に至っています。尚「一宮市」の名称も当社が尾張国一宮であることに由来しており、全国で「一宮」の名称を冠する自治体は1市6町に及びますが、市制のひかれている自治体は一宮市のみとなります。

■尾張氏は、東日本を拠点とした大和朝廷に対峙するほどの大豪族であった。崇神天皇妃、継体天皇妃、安閑天皇、宣化天皇を輩出し、壬申の乱では二万人を拳兵し、大海人皇子を勝利に導いた尾張氏である。尾張氏の祖は火明命（ほあかりのみこと）である。天照大御神の孫である天火明命（あめのほあかりのみこと）を祭神とする真清田神社はたいへん由緒の正しい神社である。

○戦災を逃れた義直公奉納の「吐水龍」

この龍は寛永8年（1631）初代尾張藩主・徳川義直公が奉納したものと同型で、本物は宝物館に保管されています。龍から流れる水（井戸水）は、平安時代に白河天皇の病を治したと伝えられ、無病息災のご神水として大切にされてきたそうです。また明治天皇が一宮を巡幸された際には、この井戸水で淹れた特別な茶が献上されました。

○神社の面積は約30,090㎡（約9,119坪）あり、その周囲には古来、土塀をめぐらしていた。その辺りを馬道具の飾立場とすると共に出店を設け、門前市も盛大に開かれていた。

○【蘭奢待（らんじゃたい）】

■「真清田神社之栞」にある蘭奢待の解説■

所蔵する蘭奢待（らんじゃたい）は正倉院の名香で、一宮城主関長安の奉納状と初代神主佐分栄清覚書とともに竹筒に納められ、現在、宝物館に展示されています。奉納状には、長安が当社に蘭奢待を寄進した経緯として、南都の大衆神人が織田信長を歓待して蘭奢待をきり、信長はその一部を近臣村井貞勝に分け、つぎに貞勝は配下の長安に与え、長安は自身の家には置き難いとして郷里の一宮真清田神社に奉納した経緯を認めています。きりとった蘭奢待の一部は、織田信長→村井貞勝→関長安→真清田神社へと渡ったこととなります。

*天正二年（1574）三月二十八日に信長が東大寺・正倉院の鍵を開けさせ、多聞山城に運んでから奪りとった蘭奢待は、四月三日に京都・相国寺で俄かに催された茶会（特別な「御会」）において、利休や堺の豪商茶人にも分け与えられたと云われていますので、当時、信長の信任厚く京都所司代の職にあった村井貞勝も拝領する機会があったものと推測されます。

○【宝物館】

建物は2階建てで、1階には神社の例祭である桃花祭に、氏子区域から引き出される馬に乗せる馬道具（駄志）28基を展示している。馬道具の様式は一様に二本の祓い串を両脇に配し、中央に真清田神社の神号や神話、伝承、昔話から題材をとった人形が配されている。制作年代は天保13年のものから明治、大正、昭和のものまで広く分かれている。戦前には80基近く保有していたが戦災にあって焼失しており、残っている馬道具は貴重なものである。

2階には神社の社宝を展示している。現在、舞楽面12面（陵王、崑崙八仙、貴徳）、御膳台盤が角切8枚、足付膳入角5枚、足付膳7枚の計20枚、神饌を供える時に使用した御膳銅皿の大皿3枚と小皿22枚が重要文化財に指定されている。

○服織神社

服織神社は、真清田神社の主祭神「天火明命（あめのほあかりのみこと）」の母神「萬幡豊秋師比賣命（よろづはたとよあきつしひめのみこと）」を祀っています。この神様は、七夕伝説の「織姫」と同一と考えられており、縁結び・安産の神様として信仰を集めています。

○一宮市道路元標

一宮は、真清田神社の門前町として発展した町であるが、平安の頃から、尾張国一宮と称されるようになった、といわれる。阿仏尼の十六夜日記に、「一の宮といふ社を過ぐる」とあるのは当社のごとで、江戸時代の御船街道も真清田神社の前を 通っていた。

③常念寺（浄土宗）

◎明德元年（1390）足利尊氏の甥とされる空漕召運上人の開山で、旧九品寺の阿弥陀仏が本尊。天正年間、兵火で炎上したが、一宮城主関十郎右衛門が、城の鬼門鎮護のため現在地に移し菩提寺とした。一宮城主関氏三代の墓がある。「蓮の寺」としても知られ、手水舎に浮かべた紫陽花も有名。

◆常念寺は、1390年、足利尊氏の甥といわれている空漕召運上人（くうせんしょううんしょうにん）がこのお寺をつくりました。

◆今はない九品寺の阿弥陀仏が本尊です。

◆今はない九品寺は、現在の九品地競技場の辺りにありましたが、廃寺となりなくなりました。

◆廃寺となった九品寺の阿弥陀仏を本尊にして、常念寺のもとをつくりました。

◆お寺は、はじめ、もっと北の方にありましたが、火事で焼けました。

○南北朝時代（1336年～）、北朝初代天皇の光厳天皇の菩提を弔うためにお寺を建立したい、と足利尊氏の甥、召運上人（しょううんしょうにん）は真清田神社に100日間お参りしたところ「これより北東の方角に柳樹あり、彼地清浄（かのちしょうじょう）なれば連夜三星相舎る（やどる）汝ち訪ひて願望を果せ」という夢のお告げがあった。召運上人は柳の木に三つ星が流れる場所を探し歩き、現在の一宮市寺島（旧小島宇寺屋敷）の地を探し当てた。そこに弥陀、観音、勢至の三尊（三つ星）が光とともに現れたので、これは私の探している地に違いないと三尊に礼拝し、謹んで三尊を安置し、一字を建立した。これが常念寺の始まりである。（この柳の木及び三つ星の縁より、山号を柳星山（りゅうしょうざん）とした）。應永2年（1395年）火事により焼失。◆関氏は、お寺が火事で焼けたことを嘆き、一宮城を守るために現在の地に常念寺を再びつくり、自身の菩提所としました。

○天正年中（1573～1593年）、兵火により焼失、一宮城主関十郎右衛門がこれを嘆き、城の鬼門鎮護のために現在の地（一宮市大江（旧常念町））に再建立し菩提所とした。

◆ここ本堂前に一宮城主関氏三代の墓があります。向かって右（東）から、一代・康正（やすまさ）※裏：政経（康正）・まさのり（やすまさ）、二代・長重（ながしげ）※関十郎右衛門長重（せきじゅうろうえもんながしげ）、三代・長安（ながやす）※関十郎右衛門長安？（せきじゅうろうえもんながやす）

◆手水舎は、少し離れたところにあったため、焼けませんでした。

○尊氏の守り本尊とされる如意輪観音菩薩（にょいりんかんのんぼさつ）坐像は、一宮市の指定文化財です。

○本堂前に一宮城主関氏三代に墓がある。

④福寿院（真言宗）

◎神亀年間行基の創建とし、弘仁年中（810-823）弘法大師が伽藍を整備したと伝える。のち文永年中（1264～）空円上人が荒廃した福寿院を再興。室町期の建立とされ、明治34年に旧国宝に指定される多宝塔は昭和8年に焼失、昭和20年空襲により本堂なども焼失。本尊十一面観音。

◆福寿院は、はじめ、810年からつくられましたが、その後、荒れ果ててしまいました。

◆1264年から、空円上人（くうえんしょうにん）が福寿院を再びつくりました。

◆昔は、10のお寺があり、この辺り一帯が福寿院の境内でしたが、今は、ここ、一つだけです。この前の道も福寿院の境内でした。

◆昭和8年に焼けてしまった、国宝の多宝塔は、今のかんちゃんラーメンの前にありました。その向こう側には、南大門もありました。もちろん焼けてありません。本堂は、空襲で焼けました。

◆お地藏さまの向きですが、神様や仏様など偉い方は、普通、南向き、あるいは、東向きに置かれます。しかし、ここ福寿院のお地藏様は西向きです。西向きのお地藏様に願い事を行うと、願いが叶うということから西向きに置かれているそうです。

⑤大江川千年碑

◎尾張国司に着任した大江匡衡（おおえの まさひら）は、悪政と洪水、凶作に悩まされていた農民たちのために、善政に務め、河川を改修し「大江川」と呼ばれるようになった。匡衡の妻は、歌仙で有名な赤染衛門で、真清田神社に詣でて歌を詠んでいる。かつては染色工場が多くあり、染め上げりの糸をこの川で水洗いして、竹竿にさして天日干しをしていた。現在は、大江川緑道がつくられ、桜の名所として、市民の散策路・憩いの場となっている。

○平成13年、水路開削1,000年を記念し、一宮市制80周年の関連事業として、「大江川千年碑」が緑道内に設置された。また、大江川や緑道を美しくしようと「大江川クリーン作戦」が行われている。

⑥八剣社・ポルトガル語の反抗碑

◎八剣社は、古くは福寿院の境内であった。社には、裏側に「センテンセ（判決）」その台座に「クロタセウ（磔刑火烙り）」と彫られた、福寿院を再興させた空円上人の碑「開祖空圓上人」がある。寛永8年（1631）から、756人の者が斬罪・磔で処せられた。難を免れた信者が円空講と称して祭り、礼拝したといわれている。火炙り刑が行われたのは一本松塚（現・黒姫神社）、殉教者の霊を慰める「水かけ地藏」は現在印田常光庵に、十字が刻印された主碑と由緒碑は現在浅野公園に移された。

◆八剣社は、古くは福寿院の境内にあり、つまりここも福寿院の一部でした。

◆ここにある碑は、福寿院を造り直された空円上人（くうえんしょうにん）の碑です。

◆江戸時代、農民の間に広がったキリスト教は、江戸幕府の考えに合わないということで、禁止されました。

◆この辺りは、田んぼが広がっており、農民の中には隠れてキリスト教を信じる人もいましたが、見つかり、火炙り（ひあぶり）や磔（はりつけ）などにあいました。

◆見つからなかった人たちは、ここにある碑の裏側に「センテンセ（判決）」その台座に「クロタセウ（磔刑火烙り）」と彫り、隠れてお参りをしていました。

○一宮市指定の文化財・木造空円上人坐像（もくそうくうえんしょうにんざそう）のレプリカが置かれている。実物は、地藏寺にある。

○この地が、ものすごいキリスト弾圧で、殉教者をたくさん出した地である

○尾張藩で最初のキリシタン弾圧が尾張一宮で行われた。寛永年間の初め、犬山地方を中心に活発に布教活動を行っていた、ポール兵右衛門、医者のコスモ道閑（これは道閑で投げ文した人の原文からの転載ミス）、レオン庄五郎、兵右衛門の息子で、丹羽郡高木村のシモン久三郎の4人が、寛永8年（1631）、一宮の印田郷裏にあった常光一本松塚（現在の一宮市緑2丁目、黒姫神社）

で火烙(ひあぶり)りの極刑に処せられた。尾張藩によるキリシタンの処刑において火炙り刑であったのは当地でのこの一度きりである。昭和 44 (1969) 年に建てられている由緒碑によると、もともとここには殉教者の霊を慰めるために地蔵が建立された。その地蔵は現在常光寺に移されている。現在の当所には、由緒碑とともに「キリシタン殉教 水かけ地蔵」と彫られた楕円形の碑が建っている。

○常光寺は、一本松塚の地蔵が移設されている寺である。無人の寺である。この地蔵は、本堂左手の小さな堂に安置されている。舟の形の光背を持ち肉彫りされたいわゆる舟形地蔵で、右側には「爲二世安樂也」と彫られている。火烙りで苦しんだキリシタンを、水で癒(いや)してあげたいという願いと共に、この地蔵に水をかけてその水を患部に塗れば、万病が治るといふ信仰が生まれた。この地蔵堂は、すぐ東側の敷地に移された。

○浅野公園(戦国の武将、浅野長政の住居跡)は、尾張浅野家葬所の地として史跡になっている。なぐさめ塚には、十字が刻印された丸みを帯びた自然石の主碑と棒状の由緒碑が並んで建っている。由緒碑裏面に記された文章と、これら碑を囲む石柵に彫られた文言によれば、この碑は昭和 42 (1967) 年に、森徳一郎氏および一宮史談会によって最初是一本松塚に建てられた。しかし翌年「区画整理後敷地狭隘のため」当地に移され、「なぐさめ塚」と呼ばれている。

⑦一宮城跡

◎平重盛の子孫であった関氏は、代々真清田神社の神主をしていたが、社領を守るため城を構えた。東西が約 50m、南北が約 90m の域城を誇り、四方を幅 3.6m の堀と土塁で守られていたという。関長安は、はじめ織田信長に、のちに秀吉に仕え、天正 12 年(1584)、小牧山の戦で長久手に戦い、討死した。この城は豊田秀吉も立ち寄ったことがあったが、天正 18 年廃城になった。

神山小学校は、明治 4 2 年、ここ城屋敷に「一宮第三尋常高等小学校」として、設立されたのが始まりで、大正 5 年「神主山」と呼ばれた地(現：神山 1・平和 1)に移転し、その後現在の神山小学校へ。

◆関氏(せきし)は、代々真清田神社の神主(かんぬし)をしており、神社を守るために城をつくりました。

◆一宮城は、50m と 90m ぐらいの広さで、まわりを堀や土塁(どるい)で囲まれ(かこまれ)、武家屋敷(ぶけやしき)のようなものでした。

◆南は旧タマコシの東入口あたり、西は旧郵便局の西側辺り、北は旧東宝映画館辺り、東は旧協和銀行の少し東の方だったようです。

◆関康正(せきやすまさ)、成重(なりしげ)、長安(ながやす)の三代が城主でした。※武将(ぶしょう)は、当時、いろんな名前がありました。

◆関長安(せきながやす)は、はじめ織田信長に、のちに秀吉に仕え(つかえ)、天正(てんしょう) 12 年(1584)、小牧・長久手の戦いで、討死(うちじに)しました。

◆のち、一宮城は廃城(はいじょう)となりました。

◆明治 4 2 年、ここにあった屋敷に「一宮第三尋常高等小学校(いちのみやだいさんじんじょうこうとうしょうがっこう)」がつくられ、のち、場所を変えて、神山小学校になりました。※尋常高等小学校は、今の小学校 5・6 年生です。

○一宮城は真清田神社の神官・関長重が社領を守る為に築いたといわれるお城で、関康正(綱長)、

長重(関十郎右衛門長重・成重)、長安(関 成政・小十郎右衛門・政倫・成正・共成)の三代の居城。長安は、小牧・長久手の戦いの岩崎城(日進市)攻めの後、池田恒興や森長可と共に長久手で戦死しています。享年三十三歳。

・天正 2 年(1574 年)に信長が行った蘭番待(正倉院の名香・らんじゃたい)切り取りの際にはその欠片が成政にも与えられているが、成政はその蘭番待を真清田神社(宝物館に現存)へと奉納している。

☆真清田神社の神官である関十郎右衛門長重が神社と社領を守るために築城したとされています。城といっても真清田神社の守護口にあるところから、武家屋敷といった方がふさわしいもので、現在の「一宮城跡」碑の立っている場所が屋敷跡になります。

○一宮城は真清田神社の神官・関長重が社領を守る為に築いたといわれるお城で、関康正、長重、長安の三代の居城となりました。関氏は平重盛の子孫といわれ、伊勢国の北畠氏に仕えていた関正康・長重父子が、熱田神宮の大宮司の力を借りてこの地に移り住み、真清田神社の神官となりました。そして社領を守るために築かれたのが一宮城です。

関氏はこの一宮城に移ってしばしば、苅安賀城の浅井氏と小競り合いを行っていたみたいで、浅井氏とは仲が悪かった様です。

長重の息子・長安は、織田信長に従い近江桜馬場、小谷城攻めに加わり、天正十年(1582)の武田氏攻めでは、恵林寺僧衆成敗の奉行に任命されたという事が信長公記に記載されています。そして本能寺の変の後は織田信雄の家臣になりました。しかし小牧・長久手の合戦時、森長可の妹婿という立場から、羽柴方に参戦。この時一宮城を捨て、一時美濃へ退去しました。この後一宮城は、織田・徳川連合軍の拠点のひとつとして、牧野康成が入城、普請が加えられ、合戦中維持されています。ところで羽柴方となった長安は、岩崎城(日進市)攻めの後、池田恒興や森長可と共に長久手で戦死しています。享年三十三歳。

その後子孫は、備中新見一万八千石の領主となり、明治維新後は子爵に列しました。

○築城年代は定かではない。城主は尾張一宮真清田神社の神官関氏である。この関氏は伊勢の関氏の遠縁という。

天正十八年
(一五九〇)
秀吉が行な
た封地の異動
にあたって、
織田信雄が、
伊勢と尾張の
二郡を領せん
としたが、秀
吉はこれを許
さず、かえ
って信雄を下野
郡に追いやってわずか二万石を給して、佐竹氏に預けた。
広綱は一宮在城中、当地の物産をしばしば秀吉に送り届けて、その機嫌を伺っていた。
長久手の戦いに、反秀吉派でありながら、長久手で戦死した一宮城主、関長安のあとに居
城したことに気を使っていたものである。
信雄が下野に赴くと、広綱も当然秀吉に対する不満があった。また秀吉の機嫌を強じた
こともあったであろう。天正十九年(一五九一)十月一宮城を去った。これは加賀の前
田家の招きもあったといわれる。能登において八千石を領した。広綱が一宮城に在城した
のは約六年で、広綱退城とともに、一宮城は廃城となった。
一宮城が関康正の享禄二年(一五二九)として広綱退城が天正十九年(一五九一)。
この間六十二年間にすぎない。名城として残る城は別として、土臺によって築かれた城は
すべてその寿命は短いようである。この地方にも城と称するものが限りなく多いが、すべ
て二、三代にして滅びている。強いものが勝つということが、こうした城の在り方を示し
ているのだとも思える。
一宮城の廃城後は尾張徳川藩のこの地方の年貢米を収める倉庫となって明治維新まで存
在した。

関十郎右衛門成重(長重とも)、菟安賀城の浅井氏と領地の境界を巡ってしばしば争っていた。その子、関小十郎右衛門成政(長安とも)は森長可の妹(姉?)を娶り、織田信忠(信長嫡男)に従って長篠合戦、有岡城攻め、三木城攻めに従った。本能寺の変の後は織田信雄に従っていたが、小牧長久手合戦では羽柴秀吉に従い、森長可とともに徳川軍と戦って討死した。

○この城に住んでいた関氏は平重盛の子孫で、伊勢関氏の一族である。関長安は、はじめ織田信長に、のちに秀吉に仕え、天正12年(1584)、小牧山の戦いで長久手に戦い、討死した。この城は豊臣秀吉も立ち寄ったことがあったが、のちには織田信雄の家来の不破源六広綱の城となり、天正18年広綱が去ってから廃城になった。

○平重盛の子孫関氏は熱田の宮司をたよりに一宮の神主となった。以後数代この地に住み、代々真清田神社の神主をしていたが、社領を守るため城を構えた。その後不破源六広綱の城となったが、天正18年(1590)広綱が去ってから廃城となった。

代々真清田神社の神主をしていた平重盛の子孫関氏が、社領を守るためこの地に構えた城。

尾張一宮停車場線沿い北側の三菱東京UFJ銀行一宮支店の玄関東側敷地内に石碑がある。

○築城年代は定かではない。城主は尾張一宮真清田神社の神官関氏である。この関氏は伊勢の関氏の遠縁という。関十郎右衛門成重(長重とも)は、菟安賀城の浅井氏と領地の境界を巡ってしばしば争っていた。その子、関小十郎右衛門成政(長安とも)は森長可の妹を娶り、織田信忠(信長嫡男)に従って長篠合戦、有岡城攻め、三木城攻めに従った。本能寺の変の後は織田信雄に従っていたが、小牧長久手合戦では羽柴秀吉に従い、森長可とともに徳川軍と戦って討死した。

○築城時期は明確にされていませんが、真清田(ますみだ)神社の神官・関十郎左衛門(現地解説板によると、平清盛の嫡男・重盛の末裔とされます)が、神社と社領を守るために築城したとされます。武士から身を守るために築城された城であるそうですが、その子・小十郎長安は織田信長・豊臣秀吉に仕え、武士としても活躍していたようですが、天正12(1584)年に小牧・長久手の戦いで池田恒興らと共に討死し、以後、信長の次男・信雄の家来、不破源六広綱がしばらく一宮城を預かったと、現地解説板にあります。広綱が天正18(1590)年に去ってからは廃城となったとされます。

○東西が約50m、南北が約90mの城域を誇り、四方を幅3.6mの堀と土塁で守られていたという。皇室、幕府から篤い帰依と保護を受けてきた由緒ある真清田神社を北に配し、その神官であった関一族が門前町(今の本町商店街)の真南に築城した居館城塞で、当時、寺院や門前町も取り囲む総構えの大土塁が外周を取り囲んでいたという。関康正、長重、長安の三代が城主となるも、1590年の小田原戦役後、家康が関東へ移封されると廃城となった。

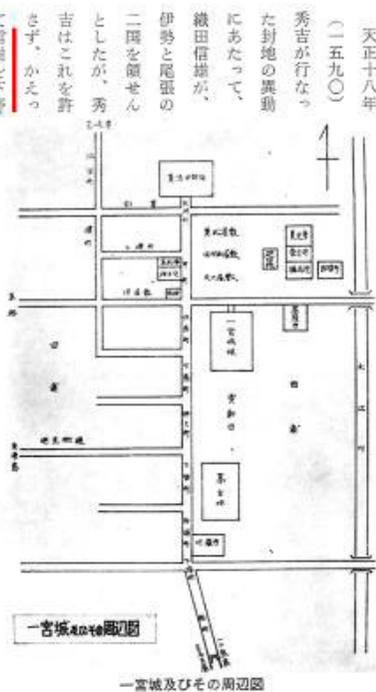
○関氏の居城であった一宮城は、新柳通り3丁目と人形町2丁目にまたがる場所にあり、「張州府志」には「東西二八間、南北五十間、四面に堀があり、関十郎右衛門長重始めてこれを築く」とある。関氏が、真清田神社の社領守護のため屋敷を固めるために築いた城屋敷とでもいわれるものであり、関長安が始めて築いた城ではないかと思われる。

○城といっても、真清田神社の守護口であるところから、武家屋敷といった方がふさわしいもので、門は神社側の北側に設けられていると考えた方が正しいとし、現在の「一宮城跡」碑の立っているところは、屋敷跡にあたる。

○「神山小学校」の創立は、明治42年11月1日で、中島郡一宮町城屋敷27番地(現・三菱東京UFJ銀行一宮支店の建つ場所)に、「一宮第三尋常高等小学校」として、設立されたのが始まりです。その後、教育制度の改革と、町の発展と共に次第に立地が手狭な環境となり、移転することとなりました。大正5年10月24日に、駅西に広がる6千余坪の広大な地域で、大小数十本の松の木が生い茂り、西地区唯一の景勝地になっていた場所、真清田神社の神主だった佐分氏の土地で「神山」と呼ばれた地に、移転されました。一宮市が誕生。それに伴って学校名も「一宮市第三尋常高等小学校」に変更され、また所在地名も、「一宮市神山町1丁目2番地」と変更になりました。昭和16年4月1日、一宮市第三国民学校、昭和22年4月1日、一宮市立第三小学校、そして、昭和23年10月1日、「一宮市立神山小学校」となりました。

○織田信長に仕えた関十郎右衛門が築いたといわれ、真清田神社の門前から続く街道沿いに位置した。堀が巡っていたというのが、江戸時代には埋め立てられ田になったという。

○築城年はよく分かっていませんが近くにある真澄田神社の神職でもあった関成重によって築城されたとされ、その後信長の次男織田信雄の家臣不破広綱が城主となりますが信雄が秀吉の怒りを買って改易された天正18(1590)年に降に廃城になったようです。



※一宮城は真清田神社の神官・関長重が社領を守る為に築いたといわれるお城で、関康正（綱長）、長重（関十郎右衛門長重・成重）、長安（関 成政・小十郎右衛門・政倫・成正・共成）の三代の居城。長安は、小牧・長久手の戦いの岩崎城（日進市）攻めの後、池田恒興や森長可と共に長久手で戦死。享年三十三歳。

・天正 2 年（1574 年）に信長が行った蘭奢待（正倉院の名香・らんじゃたい）切り取りの際にはその欠片が長安（成政）にも与えられているが、長安（成政）はその蘭奢待を真清田神社（宝物館に現存・整理中につき公開されていない）へと奉納している。

※森 可成（もり よしなり）美濃金山城主。可成の家系は美濃に住んで代々土岐氏に仕えた。弟に可政、子に可隆、長可（もり ながよし）、蘭丸（成利・長定）、坊丸（長隆）、力丸（長氏）、忠政（津山城主）、娘（木下勝俊・室）、娘（一宮城主：関成政・室）など。

※森 長可（もり ながよし）小牧・長久手の戦い：長可は池田隊と合流して徳川軍との決戦に及び、井伊直政の軍と激突して奮戦するも水野勝成の家臣・水野太郎作清久配下の鉄砲足軽・杉山孫六の狙撃で眉間を撃ち抜かれ即死した。戦死の地と伝わる場所（愛知県長久手市）には「武蔵塚」が建てられている。享年 27。

※津山城主・森忠政：忠政は織田信長の家臣であった森可成の六男である。三男成利（蘭丸）、四男長隆（坊丸）、五男長氏（力丸）はともに本能寺にたおれた。本来であれば六男の忠政もこの時に本能寺で討死していたはずなのであるが、母妙向のもとに戻されていたおかげで本能寺の変に巻き込まれずに済んだ。

⑧三八市の市神堂旧地・真清田神社二の鳥居跡

◎三八市の市神を祀ったお堂跡を示す市神堂旧地碑がある。三八市は、享保 1 2 年（1727）に始まり、日常品や綿の取引が行われた。天保 13 年（1842）には 500 以上もの店が真清田神社門前から地藏寺あたりまで軒を連ねていた。現在でも、はねあげ店が門前両側に数軒その姿を残している。この辺りは東西の道の交差点で、真清田神社二の鳥居があった。

◆三八市（さんばちいち）は江戸時代に始まり、生活に必要なものや織物売る店が真清田神社の門前（もんぜん）から地藏寺（じそうじ）辺りまで立ち並び、とても賑わって（にぎわって）いました。

◆この辺りに、三八市の市神（いちがみ）を祀った（まつた）お堂がありました。

◆市神とは、市場（いちば）の神様です。

◆この辺りは、今の本町通り、江戸時代は岐阜街道が通っており、東西の道と交わった（まじわった）ところで、人の往来（おうらい）も多かったと思われます。

◆真清田神社の二の鳥居（にのとりい）がありました。

○真清田神社史に「中町には下馬橋と呼ぶ数尺の板橋があり、中世には第二鳥居もこの地にあったと推定され」東西の道の交差点であったと記載されている。

○ここの建物の南に石仏が数体並んでいたらしい。市神堂は市神寺として、白旗通 1 丁目に新たな寺が建てられ移転した。

○天保 13 年（1842）には 500 以上もの店が真清田神社門前から地藏寺あたりまで軒を連ねていた。一宮の三八市は通りに露店を出した農民市で、日常品や綿の取引が行われた。一宮は綿裁

培が盛んだった尾西地方の綿の集散地だったことから、綿に関する店を中心に市が開かれた。三八市の市神を祀った お堂があった。三八市の中心が一の鳥居付近から門前に移り、門前町の形態になり栄えた。三八市が今の一宮及び尾州繊維産業の発展に寄与した役割は大きかった。三八市は昭和まで続いたというが、このあたりは戦災で焦土となり宿場の名残りは全くない。

◎浜神明社

◎社号は、昔は浜辺だったという伝承に由来し、本宮である真清田神社の東に鎮座しているため、東神明社とも言った。日本武尊の叔母上にあるとされる倭姫命（やまとひめのみこと）が伊勢神宮を創建するまでに天照大御神の御神体である八咫鏡を順次祀っていき、御一行が舟で伊勢に向かう途中、ここに寄られ、松の木に船を繋ぎ、あまりの寒さに腰を下ろして焚火をしたと伝えられる「御舟繋ぎ松」や「御腰掛岩」が境内にある。

○由来は古く、垂仁天皇の時代、倭姫命が神鏡を奉じ美濃の国、伊久良川の宮より尾張の国中島宮に遷幸の時、ここに滞在したことから神明津の地名をなしたとつたえている。往昔は潮が差し込み、姫の御船を繋いだとする松、腰掛け石の伝説がある。

○この神社は『尾張名所図会』にも描かれている。



⑩地藏寺（真言宗）

◎奈良時代、開基は聖武天皇、創建は行基と伝えられている。本尊は延命地藏菩薩。仁王門には、「吽形」「阿形」が安置されている。代々の尾張藩主が岐阜へ「御成り」になる際に小休止に使用したという。明治 24 年（1891）濃尾地震の「震災亡霊菩薩」がある。門脇に樹齢 400 年のイチイガシの切り株や、その他、「大塚権太夫吉正墓碑」「真清田（佐分）清円（きよつら）墓碑」「おもかるさん」などがある。大晦日にはこのお寺で撞かれる除夜の鐘を聞きながら地藏寺周辺

の人たちは新年を迎える。

◆真言宗のお寺で、創建年代は不詳だが、奈良時代の700年代前期、開基は聖武天皇、開山は行基が創建したと伝えられている。

◆地藏寺仁王門に、向かって右方は、口を結んだ「吽形（うんぎょう）」、左方は、開口の「阿形（あぎょう）」が安置されている。通常、左に安置する吽形が右に安置されている。

◆門脇に樹齢400年のイチイガシの切り株がある。市指定文化財になっていたが、老木化により伐採された。郷土の詩人・佐藤一英は終戦後、焼け野原に立っていたこのイチイガシから生命力を感じて、独自の檜の木文化論を提唱した。

◆南中の校歌の作詞者は、この佐藤一英氏。♪「宮の南の 野に立ちし…」(宮は真清田神社か?)校歌は、樹齢400年と推定される旧・市指定文化財イチイガシと「大志の地」で学ぶ南中生とをかけている?

◆明治24年(1891)濃尾地震の際に、地藏寺の建物はことごとく倒壊したとされている。寺の墓地横には濃尾地震による死者を供養する「震災亡霊菩提」がある。

○真言宗豊山派のお寺で、創建年代は不詳で、奈良時代の700年代前期で開基は聖武天皇、開山は行基菩薩行基が創建したと伝えられており、本堂、地藏堂、八脚門、鐘楼、薬師門などの建物がある。ご本尊は延命地藏菩薩、脇侍が不動明王。東海三十六不動尊霊場第三番札所。

○門脇に樹齢400年のイチイガシの切り株がある。市指定文化財になっていたが、老木化により伐採された。郷土の詩人・佐藤一英は終戦後、焼け野原に立っていたこのイチイガシから生命力を感じて、独自の檜の木文化論を提唱した。

○南中の校歌の作詞者は、この佐藤一英氏。♪「宮の南の 野に立ちし…」(宮は真清田神社か?)校歌は、樹齢400年と推定される旧・市指定文化財イチイガシと「大志の地」で学ぶ南中生とをかけている?

○地藏寺仁王門に、向かって右方は、口を結んだ「吽形（うんぎょう）」、左方は、開口の「阿形（あぎょう）」が安置されている。通常、左に安置する吽形が右に安置されている。「(ご真言) オン ウーン ソワカ(合掌)」仏敵を威嚇する恐ろしい形相の阿形は、筋肉が鎧のようで、左手は金剛手印、五指を開き正面を向けて構え、忿怒(ふんぬ・ふんど)の形相で、眼光するどい。右手は、金剛杵棒(こんごうきねぼう)を担ぎ構えている。心を閉じて煩惱を断ち切れと諭す吽形は、左手に金剛杵(こんごうしょ:インドの武器)を持ち振り上げ、右手は五指を開き腰下で構えている。

○明治24年(1891)濃尾地震の際に、地藏寺の建物はことごとく倒壊したとされている。寺の墓地横には濃尾地震による死者を供養する「震災亡霊菩提」がある。

○「おもかる石」は、まず、願いを思い浮かべながら石を持ち上げ。石の重さを確認。次に、もう一度石を持ち上げ、最初に持ち上げたときよりも軽いと感じれば、願いが叶うといわれている。

⑪豊島記念資料館

◎豊島記念資料館は、昭和41年(1966)に一宮市立豊島図書館として建設され、中央図書館が開館した後、織機類を収蔵・展示する目的で、新たに平成27年豊島記念資料館として活用されることになった。展示されている織機類は、「一宮の織物関連遺産」として「近代化産業遺産群33」の認定も受けているほど重要なもので、「尾州」を学べる場所である。

◆豊島記念資料館は、元一宮商工会議所会頭四代豊島半七氏の遺志により、昭和41年(1966)に一宮市立豊島図書館として建設され、中央図書館が開館した後、織機類を収蔵・展示する目的で、新たに平成27年豊島記念資料館として活用されることになった。

◆地機(じばた)は、織り手が腰を下ろし低い姿勢で織機を動作させることから地機と呼ばれている。

◆高機(たかばた)は、織り手は腰板に腰をかけた姿勢で、地機に比べて、織り手が高い位置で作業することから、高機と呼ばれた。

◆バツタン高機。バツタンとは、緯糸(よこいと)通し装置(飛び杼(ひ))の呼称。飛び杼は、緯入れ作業を高速化し、織物の幅広化(前は、両腕の幅に制約されていた)を可能とした。

◆豊田式木製人力織機(複製)は、豊田佐吉が、明治23年にバツタン高機を改良した手押し式の織機。一連の動作で、緯入れと緯打ち(手前に打ち寄せる)が行える。速度が、4~5割上昇した。

◆踏み織機は、足で踏み木を踏むことで、開口(経糸たていとを二分すること)・緯入れ・緯打ちの3動作が連続的に行うことのできる織機。

⑫梅ヶ枝公園

◎公園内に鉄道が通っており、汽車をかたどった遊具や実物大線路が一部敷設されているなど『鉄道』をテーマにした施設が整備されている。公園の中の展望台からは、電車を間近で見ることができ、鉄道ファンにはたまらない公園である。早春には公園の名前の通り梅の花も沢山咲き、散策にも適している。

○JR東海と名古屋鉄道の高架化によって生まれた公園。

○平成13年度には、市制80周年記念事業「公園に夢を描こう!」により名鉄本線の高架柱に小学生が絵を描き、薄暗い高架下が楽しく明るい雰囲気になった。

⑬Re-TAiL(リテイル)・旧尾西繊維協会ビル

◎旧尾西繊維協会ビルは昭和8年(1933)に建てられ、昭和20年の一宮空襲にも遭った数少ない建物。茶褐色の外壁に白石の縁どり、ゴシック風のアーチ窓など昭和の面影を今に伝える貴重なビルである。近代化産業遺産にも登録されている。現在は「Re-TAiL」という名称で、市内のメーカーから高品質な布を集め、販売するショップとなっている。

◆旧尾西繊維協会ビルは昭和8年(1933)に建てられ、昭和20年の一宮空襲にも遭った(のこった)数少ない建物。「遺」には未来まで残したいという意味が含まれている。

◆近代化産業遺産にも登録されている。

◆現在は「Re-TAiL」という名称で、市内のメーカーから高品質な布を集め、販売するショップとなっている。

◆3階にある会議室には、歴代組合長の肖像画、振り子時計、黒電話など、当時の調度品が今も残っている。

○昭和の一宮の面影を今に伝える貴重なビル。経済産業省の近代化産業遺産(繊維・機械)にも登録されており、「当時持てる近代建築技術の粋を集めて建築された建物」。

○リテイルビルは、市内のメーカーから高品質な布を集め、販売しているショップで、一般では流通していない特殊な布や糸が揃うため、遠方からファッション好きが集まる。

- ・尾州素材のマーケット
- ・オーダースーツ専門店
- ・尾州デニムの直営店
- ・バッグスクール
- ・ヴィンテージ&レトロ服のお直し専門店
- ・ジュエリー工房
- ・カフェ

○1階は、このビルを管理する事務室を中心に、組長室、2つの応接室、文書庫、宿直室で構成されていた。中でも文書庫は、重厚な扉と鉄格子の二重扉となっており、厳重な保管状況だった。文書庫の右扉には、金庫錠が破壊された盗難被害の痕跡が今も残っている。

○2階は、貴賓室、検査員・組員和室、試験室でした。昭和21年(1946年)の昭和天皇の尾州行幸の際、貴賓室を使用され、その際に座られた椅子が現在でも残っている。試験室は、この建物の大きな目的のひとつであった「粗製品防止の為に製品検査」のために使われ、尾州ブランドの発展に大きく貢献した。

○3階は、会議室、陳列室、委員和室で構成されていた。会議室には、歴代組合長の肖像画、振り子時計、黒電話など、当時の調度品が今も残っている。陳列室は、会議室で行われる新製品発表会の展示や、パーティーの際には配膳室としても利用されていた。

○扇風機、時計、金庫やインテリアなど、すべてがレトロで美しい。

⑭森春濤宅址

○文政2年(1819年)ここ一宮の医者の子に生まれ、有隣舎で漢詩を学び、45歳になるまで一宮で過ごした。名古屋、東京へと移り住み、漢詩壇で大活躍した詩人であり、一宮が誇る偉人の一人である。宅址碑に隣接して春濤詩碑「風雨踰函嶺」が併設されたが、大江川畔に移設された。

森春濤

○森春濤は文政2年(1819)ここ一宮の医者の子に生まれた。一宮の丹羽出身の鷲津幽林が開いた有隣舎で漢詩を学び45歳になるまで一宮で過ごした。眼科医のかたわら、盛んに詩作し、文人らと交わる。名古屋では桑三軒吟社(そうさんぎんしゃ)を開き、愛知県立明和高校の前身になる藩学明倫堂の教授にもなった。東京に移ってからは茉莉吟社(まりぎんしゃ)を開き、漢詩雑誌「新文誌」を発行するなど漢詩壇で大活躍した日本を代表する詩人。明治22年(1889)没する。71歳。

○文政2年(1819)、ここに生れ、有隣社学ぶ。眼科医のかたわら、盛んに詩作し、文人らと交わる。文久3年(1863)45才の時、ここより名古屋へ移住する。名古屋で、桑三吟社(そうさんぎんしゃ)を開き、藩学明倫堂にて教える。明治7年(1874)東京に移り住む。茉莉吟社(まりぎんしゃ)を開き、漢詩雑誌「新文詩」を発行する。各地を歴遊し、名声を天下にとどろかせて、明治前半期の漢詩壇に君臨した。明治22年(1889)没する。71歳。

○宅址碑に隣接して春濤詩碑「風雨踰函嶺」が併設されたが、大江川東側のほとり(天道橋北側)に移設された。

⑮旧一宮線橋台跡

○名古屋鉄道の前身である名古屋電鉄一宮線は、東一宮駅(現エムズシティー一宮)と名古屋の押切町を結ぶ一宮では最初の「電気鉄道」で、大正2年(1913)全線開通し、名古屋への足となっていた。戦後、車の普及とバス化が進み、一宮線は昭和40年に廃止された。大江川護岸の石

積造りの構造物は橋の橋台跡で、少し高くなったところを鉄道が走っていた。

東一宮駅

◆1912年(大正1)名古屋電気鉄道一宮線開業:西印田~押切町18.3km

◆所要時間は46分、運転間隔は20分、運賃は19銭

◆1913年(大正2)東一宮~西印田開通0.6km。東一宮~押切町全通

◆1921年(大正10)名古屋鉄道設立(旧名鉄)←名古屋電気鉄道

◆1928年(昭和3)旧名鉄名岐線開通(新一宮~押切町)し、東一宮と岩倉町を結ぶローカル線となる。

◆1965年(昭和40年)廃止。

◆大江川(大江用水)に架かっていた橋梁の橋台跡。

◎「えっ!ここに電車の駅があったの?」「そうだよ。エムズシティー宮のこの場所に東一宮駅があったんだよ。」名鉄の前身である名古屋電気鉄道が岩倉経由で名古屋市内の押切町と東一宮間を結ぶ一宮線を大正2年に開通させた。東海道本線はあったが、まだこの頃名鉄本線はなく、名古屋と一宮の行き来はこの一宮線を使っていた。大江川を渡る時の橋台が今も残されている。東一宮駅から岩倉駅までどこを線路が通っていたかを探してみるのも楽しそう。

○名古屋鉄道の前身である名古屋電鉄一宮線は、大正元年8月6日竣工・開通(複線)した。開業当時は押切町~西印田間18.3kmで、西印田~東一宮間0.6kmは、翌2年1月25日に延長された。所要時間は押切町~西印田で46分、運転間隔は20分で、運賃は押切町~西印田間19銭(通行税を含む)でした。戦後、車の普及により支線のバス化が進み、一宮線は昭和40年4月25日に廃止された。この案内板の基礎付近に残る石積造りの構造物は、大江川のかかっていた橋の橋台跡。

○大正2(1913)年1月25日に一宮線は東一宮駅まで0.6キロを延伸して、一宮線が全通した。同時に西印田駅は廃止となった。当時は名鉄名古屋本線がまだなかった。押切町から枇杷島を経て一宮まで直通するのは、昭和3(1928)年4月10日になってのこと。それまでの約16年間、一宮から名古屋へ行くには、岩倉経由で行き来していた。直通後は、この線は一宮と岩倉を結ぶローカル線となった。東海道本線もすでに開業していた。戦後、車の普及により支線のバス化が進み、一宮線は昭和40年4月25日に廃止された。西印田~東一宮間には、大江川橋梁が架かっていた。その橋台はいまも残されている。岩倉(西印田)側と東一宮側の橋台がともに残されている。特に岩倉側は橋台両端に斜めに積まれた石垣も残っていて、当時の築堤の斜面が想像できる。



名鉄丸栄百貨店

○名鉄グループが旧名鉄一宮線の廃止に伴い、同線の終点であった東一宮駅跡に名鉄百貨店と新岐阜百貨店に次ぐ3番目の百貨店を開設する計画。丸栄も一宮に百貨店を開設する計画。両社の計画を一本化することになり、1966年(昭和41年)12月に一宮市城崎町に資本金1億円

株式会社名鉄丸栄百貨店が設立され、1969年（昭和44年）10月1日に開業した。愛称として「メイエイ」を名乗った。

○東一宮駅のバスターミナルは、この名鉄丸栄百貨店内に移転し、「名鉄丸栄百貨店前バスターミナル」となった。

○1982年（昭和57年）2月に名鉄グループに一本化され、一宮名鉄百貨店に変更された。

○名鉄が一宮駅ビルに、名鉄百貨店一宮店を開設するのに伴い、2000年（平成12年）9月に閉店した。

○現在跡地は、分譲マンションになっている。

〈東一宮東映劇場/一宮東映会館/一宮ひがし映画劇場〉

所在地：愛知県一宮市川田町

開館：1958年

閉館：1967年

1959年の住宅地図では「東一宮東映劇場」。1960年の全商工住宅案内図帳では「東一宮東映劇場」。1960年の映画館名簿では「東一宮東映劇場」。1963年の全商工住宅案内図帳では「一宮松竹映劇」。1963年の映画館名簿では「一宮ひがし日活」。1966年の住宅地図協会ポータブル住宅地図では「一宮松竹映劇」。1966年の映画館名簿では「一宮ひがし映画劇場」。1969年の映画館名簿には掲載されていない。1970年の全商工住宅案内図帳では跡地に「国民金融公庫」。1970年のゼンリン住宅地図では跡地に「一宮国民金融公庫」。1985年の住宅地図では跡地に「国民金融公庫一宮支店」。跡地は「名鉄東一宮ハイツ」南西30mにある「日本政策金融公庫一宮支店」。最寄駅はJR東海道本線尾張一宮駅・名鉄名古屋本線名鉄一宮駅。

⑩真清田神社御旅所（富士神社）

○真清田神社の桃花祭では、祭神が巡幸し、ここ富士社境内に神輿が鎮座される。本殿脇に漢詩人森春濤が桜花祭を詠んだ「三月三日行」の詩碑がある。岐阜街道が通り、「一の鳥居」が近くにあった。また、「岐阜街道 一宮一里塚跡」の碑が境内南西角にある。かつて、一里塚・榎（えのき）がそびえていたが、空襲で焼けてしまった。

・岐阜街道一里塚跡 ・一の鳥居

・森春濤詩碑（碑文：天保11年、22歳の作）：明治時代前半に、漢詩壇で大活躍した国内の第一人者。大江川あたりで春濤が詩作したといわれる。本殿脇に一宮村出身の漢詩人森春濤が桜花祭を詠んだ「三月三日行」の詩碑がある。大江川東側のほとり（天道橋北側）に漢詩の石碑（平成元年建立）がある。

○御旅所は、祭に神輿（御祭神）が氏子地区内の由縁の地に渡御される場所である。真清田神社の御旅所は、楼門外西脇にあったが、以後楼門外東そして剣正寺跡に移設され、明治7年（1874）に現在の富士社境内（一宮市公園通）に移されたと社史にある。

○明治7年（1874）、近くにあった「一の鳥居」が朽ちてとりこわされた。

○一の鳥居は、寛保4年（1744）に建立され、桃花祭の3日には「一の鳥居」に馬の頭が揃って妙興寺村の馬を第一に列を正し、神社へ参向していたという。

○岐阜街道一里塚跡：ここに岐阜街道の一里塚・榎がそびえていたが、空襲で焼けてしまった。

B お立ち寄りスポット

⑪本町商店街

○一宮市本町商店街の歴史は江戸時代にまでさかのぼり、真清田神社の門前町として発展、繊維産業と共に栄えてきた。昭和46年には全蓋式のアーケードが設置され、日中から夜にかけては歩行者天国となる。ノスタルジックな雰囲気のお店とモダンでオシャレなお店でショッピングや食事を楽しむことができる。

○江戸時代から真清田神社前は、3と8の付く日に三八市と呼ばれたとてつもなくにぎわった門前市が開かれ、商業発展の礎となり、一宮市の中心市街地を形成した。

昭和31年からは本町通りを中心に日本三大七夕まつりと称される「おりもの感謝祭一宮七夕まつり」が開催され、一宮と言えば七夕まつりと言われるほどに親しまれてきた。真清田神社と一宮市民が『まつり』を通して調和する伝統は、一宮特有の文化と言える。

明治になり、木曽川の豊かな水と共に織物の町として繁栄し、戦後は紡績・繊維産業の一大中心地としてにぎわいをみせたが、郊外へ大型店舗の出店や、繊維産業の海外進出等により駅前繊維街は衰退していった。

一方、近年は中心市街地もコンパクトシティとして、都市構造の空間的な集約化による効率化を目指し、分譲マンションの建設や様々な業種による出店が進み、少しずつ市街地への回帰が見られる。

○市中心部を南北に延びる「本町通商店街」（全長約500m）。本町通りのアーケードは1971年（昭和46）に完成しましたが、本町2丁目～4丁目の約380mにかけての区間は2001年に10億円をかけて全面改修されました。しかし、空き店舗の多数存在する1丁目の残る120mの区間は資金難により同時期に改修できず、古いままとなっていました。撤去。

○かつてアーケードを南に抜けると旧「グランドタマコシ」の大きなショッピングセンター、本町通りには各種商店のほか「大口屋」「タマコシ」、真清田神社門前には「ダイエー」「横井百貨店」などがあり、商店街一帯は大変賑わっていましたが、2004年にタマコシが倒産し、結果的に郊外型SCに押される形で往時の賑わいはなくなってしまった。

⑫大江川緑道

○大江川緑道は、桜並木を活用し、水の公園ゾーン・桜見橋ゾーン・おまつり広場ゾーンとして整備され、市民が四季を通して憩い、集うことができる散策路。かつては染色工場が多くあり、染め上がりの糸をこの川で水洗いして、竹竿にさして天日干しをしていた。大江川や緑道を美しくしようと「大江川クリーン作戦」が行われている。

○市民が四季を通して憩い、集うことができる散策路である。兩岸に、約330本のソメイヨシノが競い合うように川面に枝を張り出し、川を流れゆく桜の花びらは春を感じさせてくれる。桜まつり期間中にはライトアップされた夜桜を楽しむことができる。平成13年、水路開削1,000年を記念し、一宮市制80周年の関連事業として、「大江川千年碑」が緑道内に設置された。また、大江川や緑道を美しくしようと「大江川クリーン作戦」が行われている。

⑬一宮市役所本庁舎

○14階展望フロアは、地上50mにあり、展望を楽しむことができる。また、「市民ギャラリー」

があり、市民の憩いの場となっている。11階のレストラン「サンライズ」で眺望を楽しみながら「一宮モーニング」でもいかが。旧庁舎階段手すり大理石の中のアンモナイトは、13階第1委員会室傍聴席手すりに再利用されている。委員会を傍聴しながら化石探しをしてみても。

㉔オリナス一宮

◎オリナス一宮は、大正13年に旧名古屋銀行一宮支店として建てられた歴史ある建物を、「夢を織りなすつどいの場」としてイベントなどに活用できるホールとして再生した、レトロな味わいのある施設。大正13年当時を再現した入口を入ると、旧名古屋銀行の金庫が見える。

○オリナス一宮は、大正13年（1924年）に旧名古屋銀行一宮支店（設計：鈴木禎次鈴木氏は他に松坂屋本店や旧名古屋銀行本店（三菱東京UFJ銀行貨幣資料館）などを設計）として建てられた歴史ある建物を、イベントなどに活用できる約150平方メートルの多目的ホールとして再生した施設。「オリナス」は「織り成す」をイメージしている。紡績・織物産業の一大中心地であった一宮市の歴史的・文化的遺産を未来に引き継ぐ施設であることから、多くの人々に親しまれるよう願いを込めて名付けた。

○一宮市役所西分庁舎。しています。旧本庁舎は解体されて、こちらの西分庁舎は耐震補強やバリアフリー化工事を行った上で保存されている。

㉕中央図書館

◎尾張一宮駅前ビルの5階から7階が図書館になっている、全国的にも珍しい鉄道駅と一体になった公立図書館。館内の利用席は700席以上、閲覧席やブラウジング席が297席、学習室277席、ブースごとにたくさん椅子が置いてあり、利用に便利。フカフカの絨毯を敷いた「おはなしのへや」や子ども向け学習室なども設置されている。開館時間は9時から21時まで。

○iビル内に開館した図書館で、年間100万人を超える方にご利用いただいている。開館時間は午前9時から午後9時まで。

㉖尾張一宮駅前ビル（iビル）

◎平成24（2012）年に開設した、図書館や子育て支援センター、飲食店が集まる複合施設で、交流・文化拠点としての役割も担っている。半屋外の開放的なシビックテラスは、イベントなどにも活用され市民の“まちなか”の憩いの場となっている。

C 祭り・イベントの紹介

◎桃花祭 4月3日

◎真清田神社の例大祭で、桃の節句にちなんだ厄払いの祭り。江戸時代までは旧暦3月3日の桃の節句に行われていた。桃の木の枝に厄を託して木曾川に流したと伝えられており、これが桃花祭の始まりといわれている。別名「馬まつり」ともいわれ、神輿の巡幸には、飾り馬が練り出され、昭和の中期までは、百数十頭の馬が出ていた。空襲で焼け残った馬具（石山町の金毛丸尾狐、朝日町の聖武天皇）は、宝物館に収蔵されている。

○昔、木曾川の流れが神社の周囲にあったころ、そこには桃の木がたくさんあったので、参詣者はその桃の木の枝に自分の厄を託して木曾川に流したと伝えられている。その後、木曾川の流れ

も大きく変わったので、桃の枝を神前に供えて行うようになった。

○真清田神社の例大祭で、神様のご鎮座を祝うとともに、桃の節句にちなんだ厄払いの祭り。江戸時代までは「桃花会（とうかえ）」とよび、3月3日の桃の節句に行われていた。明治43年から太陽暦の4月3日となった。別名「馬まつり」とも称され、神輿の巡幸には、馬上に御幣（ごへい）、人形をのせた「馬の塔（うまのとう）」と呼ばれる飾り馬が練り出し、稚児行列、一宮消防音楽隊、民謡会のパレードなども加わる。また、神社境内で流鏝馬神事が行われ、桃花祭前の4月1日には短冊祭、2日には歩射神事や試楽祭が行われる。例大祭を行う全員が冠や烏帽子に桃の花をつけている。市内では、4月1日の朝に献灯ちょうちんが飾られ、最終日の4月3日には町内からの子供獅子や献馬が奉納される。真清田神社の門前・東西には祭車（山車）が飾られ、祭りの雰囲気盛り上げる。

○往古、当社の周りは桃の木が群生し、この地は「青桃丘（せいとうきゅう）」と呼ばれていました。霊力があると信じられているこの桃の枝をもって身のけがれを祓い、当時神社の近くを流れていた木曾川にこの枝を流して除災招福を祈ったのがこの祭りの始まりとされています。今日では神前に備える供物に桃の小枝を添え、この神事に奉仕する者全てが冠に桃の小枝をつけています。

○駄志馬は氏子の各町内より、桃花祭に御用馬としてひき出すもので、いつのころから始まったのか、よくわからないが、室町時代の応永年間（1394～）までは確実にさかのぼることができる。（「新編一宮市史」）また、天正（1573）の頃にはすでに百数十頭の馬が揃ったという。享保（1716）の頃には数十頭が神領地より献馬されている。戦前は試楽の日（四月二日）神社に参拝して本殿を右側より左側に一周し、馬繫場に馬をつなぎ、馬具を神社の高塚の一部屋ごとに飾り立て、拝観したものである。また翌三日は午後二時までには御旅所に集合して神輿に供奉して神社にくり込んだ〔資料・山車馬行列次第〕

○古来からの「馬之塔（飾り馬）」が順序に従い町内衆によって練りながら神社に向かった。馬の口に扇状に綱を付け女長襦袢を着、白塗り化粧をした若者が千鳥様に練っていた。以前は数十頭の奉納が夕方までかかって奉納されていた。

○桃花祭は、津島の天王祭り、国府宮の裸祭りとともに尾張の三大祭りといわれている。

○飾馬・形代馬（かたしろうま）・馬の塔・馬の頭・走り馬などといい、俗にオマントウともいっていた。今日では献馬といっている。

この献馬の数は、天正以前（1573）百数十疋、寛文頃（1661～）七十～八十疋、享保頃（1716～）三十～四十疋と、次第に減っていくことを「真清探桃集」の著者は嘆いているが、昭和11年（1936）には八十一疋を数えている。各町内がアイデアを求めて作った飾り馬具をつけた献馬はかけ声も勇ましく、馬具に取り付けた銀鈴の響きも軽く神社に行く。村の壮年任侠の者が、馬ごとに数十人引き立てて、つぎつぎとくりだす壮観さは「尾張名所図会」（江戸時代）の「馬の頭」のとおりである。神社に着くと楼門から拝殿前に進み、拝礼してから本殿の周囲を一周し、各町内に帰る。こういう馬の頭の行事は尾張から西三河に広く行われている。

◎一宮七夕まつり 7月下旬

◎昭和31年に始まった「おりもの感謝祭一宮七夕まつり」は、毎年7月、織物の神様を祀っている真清田神社を中心に行われ、市民の夏の最大のイベントになっている。その飾り付けのけんらん豪華さは、仙台、平塚の七夕まつりとならび日本の三大七夕まつりの一つといわれている。

一宮七夕まつりは、7月の最終日曜日をフィナーレとする木曜日からの4日間、全市をあげてくりひろげられる。

〇一宮市民の守り神として崇敬されている真清田神社の祭神「天火明命（あめのほあかりのみこと）」の母神「萬幡豊秋津師比売命（よろずはたとよあきつひめのみこと）」は、太古から織物の神様として知られ、そのご加護により当地方の織物業が発達したといわれている。織物と因縁の深い牽牛・織女にちなんだ、おりもの感謝祭である。

〇仙台、平塚の七夕まつりとならび日本の三大七夕まつりの一つとして称賛されるほどで、100万人を超える人出でにぎわう。

◎鯉のぼりフェスティバル 4・5月

〇市民から提供された500本以上の鯉のぼりと園児が手作りした鯉のぼりを本町商店街で展示。ゴールデンウィーク中にはピンゴ大会や写生大会など各種イベントも行われる。

〇4月上旬から500本以上のの鯉のぼりが飾られますよ。一宮本町商店街の鯉のぼりフェスティバルとして約一か月間、端午の節句まで飾られます。写生大会も行っている。

◎一宮だいたいフェスタ・おいち祭り・杜の宮市・まちの宮市

◎「一宮だいたいフェスタ」は、ハロウィンをテーマにしたお祭り。本町商店街では、「138 ハロウィン ～おりものパレード～」、衣装コンテストなどが行われ、お菓子のプレゼントやイベントブースなど、子供から大人までが楽しめるイベント。

◎おいち祭りは、ちょっと風変わりの名前”おいち”は、尾張の”お”と一宮市”いち”からとったものだといわれるんだとか～一宮市中心市街地、商店街 8商店街からなるお祭りで、43回を迎えた歴史あるお祭り。

◎真清田神社の門前から始まった「杜の宮市」は、春に開催されるボランティアなどによる、市民手作りのカルチャーイベント。真清田神社から本町アーケードに、ライブやワークショップ、キッチンカーやフードコートなどが出、一日中楽しむことができる。「まちの宮市」は、一年を通して3か8が末尾つく日曜日に開催される。

◎一宮だいたいフェスタ 10月

◎「一宮だいたいフェスタ」は、ハロウィンイベントをテーマにしたお祭り。ダンスイベントやフットスポット、トリックオアトリートなどお祭りや催事、子供たちが楽しめるイベントが一宮一体で開催される。本町商店街では、「138 ハロウィン ～おりものパレード～」、衣装コンテストなどが行われ、お菓子のプレゼントやイベントブースなど、道中に楽しむ仕掛けがいっぱい。街全体で「ハロウィン」を盛り上げる。

〇子供たちが楽しめるイベントが本町商店街一体で開催されます。お祭りや催事が、毎年10月に一宮市内で開催される

〇秋のハロウィンイベントをテーマにいただいたフェスタは、2014年から行われるようになった。本町商店街を中心に仮装パレードを行う「138 ハロウィン ～おりものパレード～」、衣装コンテストなどを実施。お菓子のプレゼントやイベントブースなど、道中に楽しむ仕掛けがいっぱい。街全体で「ハロウィン」を盛り上げる！

◎一宮桜まつり 4月上旬

◎大江川の両岸では、300本を超えるソメイヨシノが見事に咲き誇り、4月の桜の開花に合わせて、様々な場所でイベントが行われる。川の両岸の遊歩道を歩いたり、公園の桜の下で食事をしたりといった日本の風習「お花見」を楽しむ。夜はライトアップも行われ、ピンク色の桜が暗闇に浮き上がる幻想的な夜桜を楽しむこともできる。

D 偉人・歴史街道・宿場町

◎森春清は文政2年ここ一宮の医者の子に生まれた。丹羽出身の鷺津幽林が開いた有隣舎で漢詩を学び45歳まで一宮で過ごした。名古屋では桑三軒吟社、東京では茉莉吟社を開き、漢詩雑誌「新文誌」を発行するなど漢詩壇で大活躍した日本を代表する詩人。

◎佐藤一英は、4歳の時、父は旧豊島図書館の所にあった一宮裁判所へ転勤。そのため、一宮町大字中ノ町22番地（現・本町四丁目13-14）へ転居した。明治39年一宮男子尋常小学校（現・大志小）に入学、3年間ここで学んだ。3年時は萩原に住んでいたが、汽車で大志まで通っていた。地蔵寺の門脇に樹齢400年のイチイガシの切り株がある。終戦後、焼け野原に立っていたこのイチイガシから生命力を感じて、一英は「櫻の木文化論」を提唱し、後に、南部中学校校歌を作詞した。代表作に長編詩「大和し美（うるわ）し」。版画家の棟方志功はこの詩に感化されて版画巻を発表し、出世作に。30代で雑誌「児童文学」の編集を担い、当時無名だった宮沢賢治の童話を掲載して世に送り出した。

◎巡見街道は、江戸時代に幕府から派遣された「巡見使」が通った道で、既存の主要道を連続させて設定された道である。「巡見使」とは、幕府が政治の参考にと、諸国の政情を視察する仕事で、百人ぐらゐの行列をなしていた。幕府のきげんをとるため、藩主はたいへん気をつけて準備を行い、村民の負担も大きかったようだ。巡見使は将軍が変わるたびに派遣され、尾張・三河国への派遣は、少なくとも8回はあったらしい。

〇巡見使は千石から数千石取りの幕臣が任命するのが通常で、1名につき数名の直属の部下と10数名の近習者、および20数名の足軽や供回りが随行して30～40名ほどの人数になったので、3名の巡見使では100人ほどの一団となり、迎える側の準備も大変でした。

受け入れ側は事前の情報収集に努め、傷んだ道路や橋梁を修築し、必要な人足と馬匹、水夫と船舶などを揃えた。巡見使の昼休憩と宿泊には、城下や街道筋の宿場町なら本陣か、藩の施設（藩主のための御茶屋や賓客用の御客屋といわれた建物）が利用されたが、視察の目的から僻地へ赴くことも多く、在方（農山漁村部）の村々をまわるときは座敷のある上層の農民や商人の家か、寺院があてられた。巡見使一行は相場の価格の米代と宿泊料をきちんと支払い、食事も一汁一菜と決められていて、過剰な接待はしないことになっていたが、実際はそうもいかなかったようです。休泊所となった民家にはしばしば藩の費用で門や湯殿、雪隠が増設され、道路の清掃やさまざまな物資の手配などで藩士も領民も奔走した。巡見使の報告によっては、幕府のきげんをそこねることもあるので、藩主はたいへん気をつかい、家老を接待役として半年も前から準備をし、巡見使のお供には、100名近い者が従って、接待に務めている。宿の修理、巡見使一行の宿泊代は藩より支払われたが、人馬賃、諸入り用は村民の負担だった。

○巡見街道は愛知県江南市巡見へ延びてきます。ここ愛知県江南市松宮町から、一宮・津島・弥富へと街道は続く。

○名鉄尾西線のガード下から北側を走る東海道本線ガードを北に向かって「巡見街道」は延びている。

◎岐阜街道は、江戸時代に、尾張名古屋と美濃岐阜を結んだ街道。美濃が尾張藩領となって以後は、藩の政治上にも重要な街道となった。尾張藩主の岐阜御成の節は必ずこの岐阜街道（途中木曾川で分岐し、御成道を通って岐阜へ）を利用し、途中一宮宿で休憩をしていた。鮎鯉街道とも呼ばれ、尾張藩が毎年、長良川の鮎鯉を江戸幕府に献上するために利用した。湊町笠松には、美濃郡代（明治初期は岐阜県庁）が置かれ、人が多く行き来し、物流量の多い街道であった。

○岐阜街道は、名古屋街道、笠松街道、鮎鯉街道、などと呼ばれ、稲沢市井之口を起点として、一宮市を経て木曾川を渡り岐阜県に入り、笠松町から岐阜城下まで六里半の道で、旧国道 22 号（現在の県道名古屋一宮線・岐阜稲沢線）の元になっている。鮎鯉街道と呼ばれたのは、尾張藩が毎年、長良川の鮎鯉を江戸幕府に献上するために利用した道であったことによるが、鮎鯉街道も含め、いつ命名されたのか、どこまでのコースを指すのかは、諸説あり。

○江戸時代に、尾張名古屋と美濃岐阜を結んだ街道。美濃が尾張藩領となって以後は、藩の政治上にも重要な街道となった。尾張藩主の岐阜御成の節は必ずこの岐阜街道を利用し、途中一宮宿で休憩するのを例としていた。現在の国道 2 2 号線などの前身である岐阜街道は、真清田神社の門前を避けて、西に鉤の手に折れ、神社の西を抜けて行く。

○江戸時代には、岐阜の町が尾張徳川家領となって、尾張名古屋藩の領内統治上の重要街道になった。岐阜・長良川の鶴飼は尾張名古屋藩の直轄事業となり、長良川で獲れた鮎は塩漬けにされ樽に入れられて寿司（鮎）にされ、名古屋城の尾張藩主や江戸城の将軍家に直送された。

○沿道には、尾張国一の宮の真清田（ますみだ）神社を抱える一宮や、尾張国府と国府宮が所在した稲沢、また江戸時代に幕府美濃郡代が置かれた港町の笠松もあり、東海地方でももっとも人の行き来が多く、物流量が多い街道として歴史が続いている。

◎鎌倉街道は、平安時代、この道は京都へとつなぐ貢納の道であったが、鎌倉に幕府が開かれると、政治の中心の鎌倉と、経済・文化の中心の京都を結ぶ街道となった。京鎌倉往還とか鎌倉道とも呼ばれ、鎌倉海道とも書く。江戸時代に美濃路や岐阜街道が整えられたため、鎌倉街道は主要道ではなくなった。この街道は、濱神明社と牛野神明社を通っていたが、現在ではその間のルートははっきりしない。

○鎌倉幕府開設以来、各地から鎌倉に向かう中世の古道で、鎌倉往還とか鎌倉道とも呼ばれ、鎌倉海道とも書く。黒田（木曾川）から南下し、いまの一宮市内に入った。真清田神社の東を通過して、大江用水に沿いながら、牛野・妙興寺をぬけて下津（稲沢市）に向かった。この鎌倉街道の一宮での位置は、黒田→馬寄→九品地→牛野→妙興寺→（赤池）であったといわれている。しかし、長い年月の間に改修されたため、この街道の痕跡を求めることすら困難である。

○江戸時代に美濃街道（美濃路）が整えられたため、鎌倉街道は主要道ではなくなった。

◎一宮宿は、江戸時代初期に整備された岐阜街道が村の中央を通り、一の鳥居付近にできた宿駅。三八市の中心が現・本町へと移り、一宮宿もそちらへと移っていった。常備の人馬は 25 人・25

疋、問屋場が 2 軒あり、尾張藩主の休憩場所、献上鮎鯉の搬送荷を美濃街道清須宿へ宿次するなど、重要な任務をもっていた。

○県道 457 号は、「伝馬通り」と呼ばれており、その標識もある。この辺りは、一宮宿の中心で、問屋場があったようだ（「一宮村絵図」）。

○江戸時代初期に整備された岐阜街道が村の中央を通り、一の鳥居付近に宿駅ができたことにより、天保 3 年(1683)には、青物、農具、綿業道具などを主な取引商品として交換し合う地方の中心地として発展してきた。

◎大志小学校沿革

明治 36 年(1903) 一宮男子尋常小学校として創立

明治 42 年(1909) 一宮第四尋常小学校と改称

大正 6 年(1917) 尋常科女子部を合併

大正 15 年(1926) 第 7 回全校区少年野球大会優勝

昭和 2 年(1927) 第 8 回全校区少年野球大会優勝

昭和 13 年(1938) 一宮市第五尋常小学校(現・向山小)分離

昭和 16 年(1941) 一宮市第四国民学校と改称

昭和 22 年(1947) 一宮市立第四小学校と改称 学校給食開始

校内に、一宮市立南部中学校開校

昭和 23 年(1948) 一宮市立大志小学校と校名変更

昭和 48 年(1973) 学校プール完成

昭和 58 年(1983) 記念館・講堂取り壊し 屋内運動場竣工

平成 7 年～ 一宮市小学校ミニバスケットボール大会優勝 3 回

一宮市民ロードレース大会男子継走の部優勝 4 回

一宮市民ロードレース大会女子継走の部優勝 2 回

E 思い出のアルバム



